



「五足の靴」遊歩道を歩く

歌集『サラダ記念日』でセンセーショナルなデビューを飾った俵万智さん。ヨナルな薄かつた短歌をグッと身近に引き寄せてくれました。

今回は、天草町で行われた「五足の靴顕彰全国短歌大会」に出席された俵さんに、短歌の魅力などを語つてもらいました。

歌集『サラダ記念日』でセンセーショナルなデビューを飾った俵万智さん。ヨナルな薄かつた短歌をグッと身近に引き寄せてくれました。

今日は、天草町で行われた「五足の靴顕彰全国短歌大会」に出席された俵さんに、短歌の魅力などを語つてもらいました。

「五足の靴」の印象はいかがですか。

海の青さが違うんですね。私は、海が大好きなので海がきれいだって聞くとすぐ行きたくなるんです。町の方々もとても気さくで暖かくて。こういう人との出逢いも旅の楽しみの一つですね。

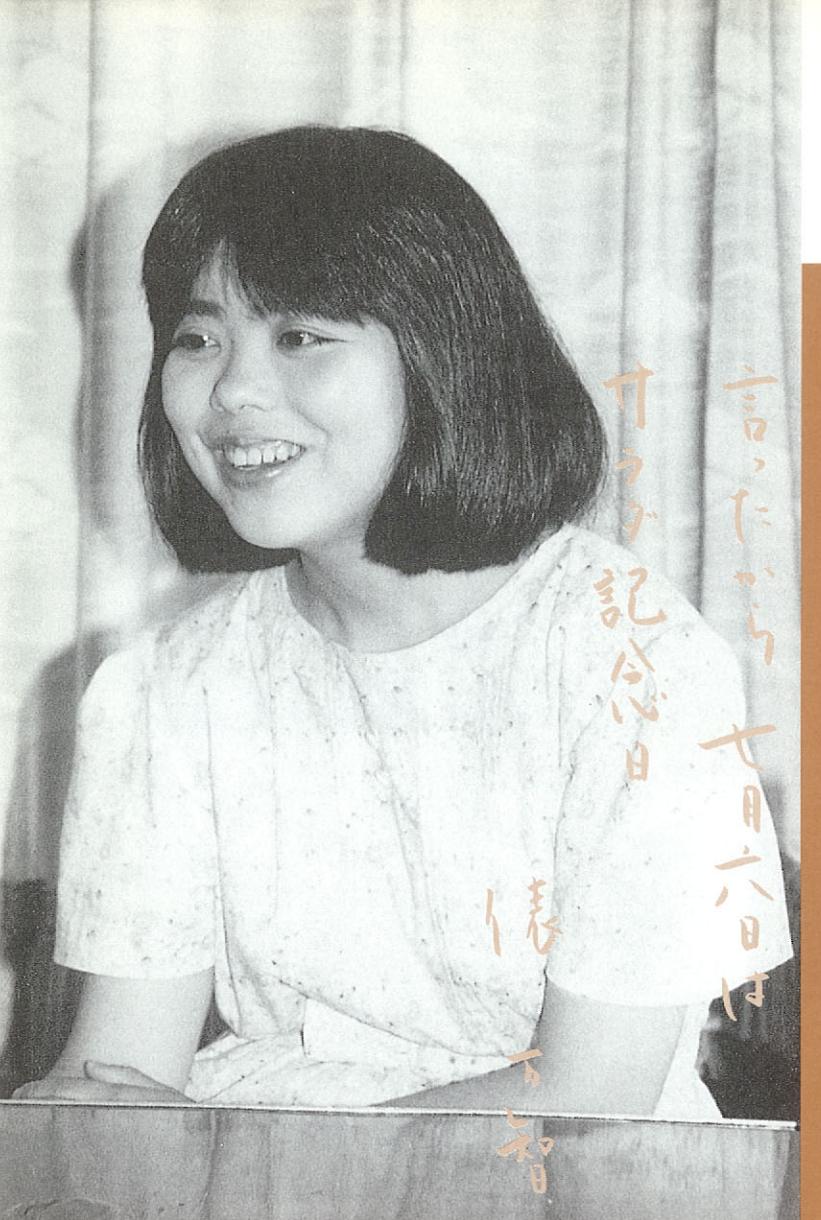
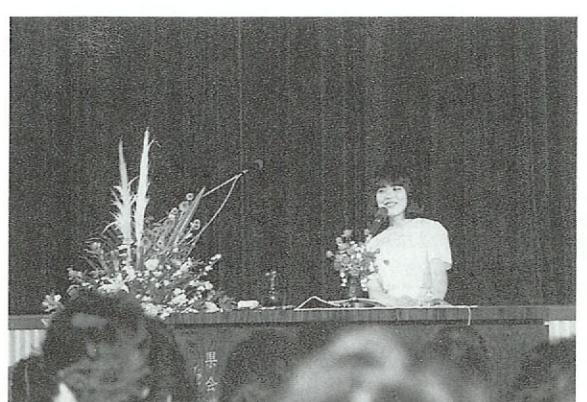
「五足の靴」についてはどう思われますか。

大変なことだと思います。明治の文壇のそぞうたる顔ぶれですものね。その五人がこの天草の地を訪れますばらしい紀行文を残しているなんて、正直いつ今まで知らなかつたんです。ここに来て、実際自分でその足跡を辿ってみて感激も深まりました。私も彼らと同じ20代の日にこれを訪ねることができます。嬉しく思っています。まわりの人たちには「六足の靴」だつていわれているんですよ。今度はぜひ阿蘇まで足を伸ばしてみたいなあ。

短歌の魅力って何なんでしょう。

そうですね。まず、五七調のリズムの心地良さ、三十一音の持つ不思議な魅力とでもいうのかな。感じたことをこの短い文の中に切り取っていくんです。短いが故の強さみたいなのがあって、その中の、「言わない」部分を読む人がどう膨らませてくれるかも楽しみなんですね。作り手と読み手がいて初めて短歌の世界が成り立っているんだと思います。

また、日常生活の中の小さな感動や心の揺れ、見逃してしまった細かい



◇歌人——俵万智さん

短歌は「魔法の杖」私にとってなんですね。



五足の靴

明治四十年（一九〇七）、与謝野鉄幹、木下李太郎、北原白秋、平野万里、吉井勇の五人が天草を中心とする九州西部のキリストン遺跡を巡り、紀行文

「五足の靴」を著した。この旅行は一行五人のその後の文芸活動に画期的な影響を及ぼしたといわれる。彼らが目指した大江天主堂のある天草町では、「五足の靴」を記念して毎年「五足の靴顕彰全国短歌大会」を開いている。